

## 心 理 学 科

学科長

大 島 剛

OSHIMA Tsuyoshi

### 第3回心理学フォーラム

日 時：2016年3月6日（日）

午後2時～午後4時30分

場 所：神戸親和女子大学

三宮サテライトキャンパス

今回のフォーラムは、「就活生の心理とサポート―保護者と考える就職支援のあり方―」と題し講演が行われました。参加者は、本学学生および保護者、大学キャリアセンター職員、ハローワーク職員など33名に出席いただきました。

リーマンショック直後、大学生の採用状況は大きく悪化しましたが、年々好転してきています。しかし、何社も採用試験を受けても内定を得られない学生、不採用通知を受け続ける中で次第に自信をなくし就活そのものをやめてしまう学生、自分を見失う学生などなど、大変さは依然として変わっていません。このような状況に対して、心理学や教育学、そして支援にあたる現場の観点から学生たちにどのようなサポートが必要か、またサポートに当たる人々はどのような姿勢、考えが必要かについて考えるフォーラムとなりました。

フォーラムではまず、本学心理学科の辻川典文氏とキャリアセンター本間ひろみ氏の2名が話題提供として講演を行いました。辻川氏は、就職活動にかかわる過去のアンケート調査の結果をもとに「就活生に対するソーシャルサポート」と題して講演を行いました。就活生のサポートの主な担い手は「友人、親、キャリアセンター」であること、そして、その中でも常にそばから見守れる親の役割の重要性について説明が行われました。本間氏は、キャリアセンターで学生支援にあたる中で経験を踏まえて「学生の言葉から見える保護者のあり方～学生対応より～」と題して講演を行

いました。保護者と学生の就職活動のとりえ方の特徴、相場感の違い、親の何気ない一言に左右される学生などについて説明がありました。その中でも、学生は親が思っている以上に親の行動や発言を気にしていると述べ、親の対応の重要性を語りました。

話題提供に続いた基調講演では「就活生の心理とサポート」と題して、南山大学人文学部心理人間学科教授の浦上昌則氏が行いました。浦上氏は、青年期の進路選択を専門に研究されており、キャリア教育の歴史やその在り方について、心理学だけでなく教育学や社会学など多面的な角度から検討されています。今回の講演では、最近の社会状況を踏まえ、なぜキャリア教育が必要になったのか、キャリア教育ではどのような視点が必要か、サポートで重要な点などについて説明がありました。キャリア教育については、国（行政）や企業の問題意識からその必要性が叫ばれるようになり、学生個人の「幸せ」という本質的な視点が抜けてしまっているのではないかという指摘、キャリア教育の結果、本当に意欲的な学生が増えたのだろうかという疑問などの指摘がありました。またサポートにおいては、不安をおおるような情報に振り回されすぎず、サポートする側の人生経験を踏まえた対応が重要であると指摘もありました。学生に求める力としては、失敗した時の現実との折り合いの付け方を身に付けさせること、自分の考えを相手にわかるように説明できる力を身に付けることの重要性を述べられました。

話題提供、基調講演の後、質疑応答が行われました。その中で「一人暮らしをしている学生の対応の在り方」、「キャリア教育の本質とは何か」、「就活生の不安をどう向き合うか」などについて活発な議論が行われました。

就職活動中の本学学生を持つ保護者の方を念頭に置いたフォーラムでしたが、思いのほか、様々な大学のキャリアセンターやハローワークの職員の方々など学生のサポートに当たる様々な立場の方にご参加いただきました。その分講師の方々のほうも保護者だけでなく、就職活動を支援する立場の職種に向けた内容にも広げていただいたことで、厚みのある有意義なフォーラムとなりました。心理学の領域ではあまり取り上げられないテーマであったので、貴重な時間であったと思います。